

平成 26 年 6 月 18 日

『ロング・グッドバイ』

サクラが散った頃、NHK土曜夜ドラマ『ロング・グッドバイ』という番組に目が留まり、はて聞いたことがあると思ったら原本が見つかった。

著者はアメリカの探偵小説家でハードボイルド派の第一人者とされるレイモンド・チャンドラー(1888-1959)の代表作の一つで原題はThe Long Goodbye(広辞苑は「長いお別れ」と訳している)。

手元の原本は米国のポケットブック版で1953年初版、つまり昭和28年茨城大学入学の年。初読は昭和36年とメモしてあり、“桜井益雄教授から推理小説を読めという啓示を受けた”のを少しは実行していたらしい(委細は同窓会会報23号「やっぱり青春：水戸発、鈍行横浜着」)。

こうした奇縁で再読する気になった。「ロング・グッドバイがあれば美しいのは」と述べている1961年4月の岩波書店『文学：諸外国の推理小説』も後押ししてくれた。NHKドラマの影響か書店には清水俊二や村上春樹の邦訳が並ぶが臆せずアメリカ英語にチャレンジ。

主人公は米国社会では既にビジネスとして確立している私立探偵、名はフィリップ・マーロウ。相手のテリー・レノックスは第二次世界大戦末期に英国特殊部隊に属しノルウエーの小島でナチス・ドイツの秘密国家警察ゲシュタポに囚われた。テリーはそのときの後遺症で神経にやや異常をきたしたらしいものの礼儀正しく、大金持ちの若い女性に何回も惚れられ、マーロウにもナゾの人物というあたりまではなんとか理解できた。二人の友情は無限の美学とも読めるが、テリーのどういう人間性がマーロウを最後の最後まで惹きつけたのか？ロング・グッドバイは別れの言葉という点は門外漢にも分かるのだがマーロウがテリーに感じたのか、それとも最後にマーロウを密かに訪ねたテリーのどん底からの叫びか、気取って申せば20世紀の詩篇・de profundisなのか？このあたりになると愚鈍の身には無理。表題にすぎないなどと決めつけたらチャンドラーに申し訳ない。素人談義はここまで。

ところで、『ロング・グッドバイ』は同窓会を思い出させてくれた。一つは水戸に本部のある同窓会、もう一つは首都圏在住在勤者の水交会。水交会は昨年20年目を迎え、次の20年を目指して優れた後輩が執行部を盛りあげてくださっている。つまり新陳代謝が続いているからどちらの同窓会にもロンググッドバイ(長いお別れ)は生じない。

他方、文理学部同期会となると話は別で、後輩の居ない有限の世界である。昭和32年(1957)卒5回生の仲間は八十歳前後だが2年ぶりに同期会の案内状が届いた。ロンググッドバイなどと言われたくないし言いたくもない。

メキシコに高飛びするテリーに頼まれて国境の空港まで遠路クルマで送ったマーロウは“Good luck, Terry”と言って別れる。達者でな、同期会にはこのニュアンスが心地よさそう。

投稿者 文理政経5回生 高田平二